

4章. 富山県を襲った地震-過去の液状化被害-

富山県は他府県と比べると、比較的地震被害の少ない県です。過去に顕著な被害をおよぼした主な地震は8回あり、そのうち2回の地震で液状化と考えられる現象の履歴が確認されています。

富山県に被害を及ぼした主な地震一覧表

発生西暦	発生和歴	地震の名称(地域)	主な被害	液状化履歴	最大震度
863年 7月10日	貞観 5年	(越中・越後)	山崩れ、住家損壊、圧死者多数	記録なし	不明
1586年 1月18日	天正 13年	天正地震(畿内・東海・東山・北陸)	高岡市南西部の木船城が崩壊、圧死者多数	記録なし	5
1858年 4月 9日	安政 5年	飛越地震(飛騨・越中・加賀・越前)	常願寺川の上流が堰き止められ、後に決壊して、死者140名、家屋倒壊及び流出1,612棟、大山町で山崩れにより死者36名。	履歴あり	6
1891年 10月28日	明治 24年	濃尾地震	越中で家屋全壊2棟	記録なし	4
1930年 10月17日	昭和 5年	(大聖寺付近)	高岡市で死者1名	記録なし	5
1933年 9月21日	昭和 8年	(能登半島)	負傷者2名	記録なし	4
2007年 3月25日	平成 19年	平成19年能登半島地震	負傷者13名	履歴あり	5弱
2007年 7月16日	平成 19年	平成19年新潟県中越沖地震	負傷者1名	記録なし	3

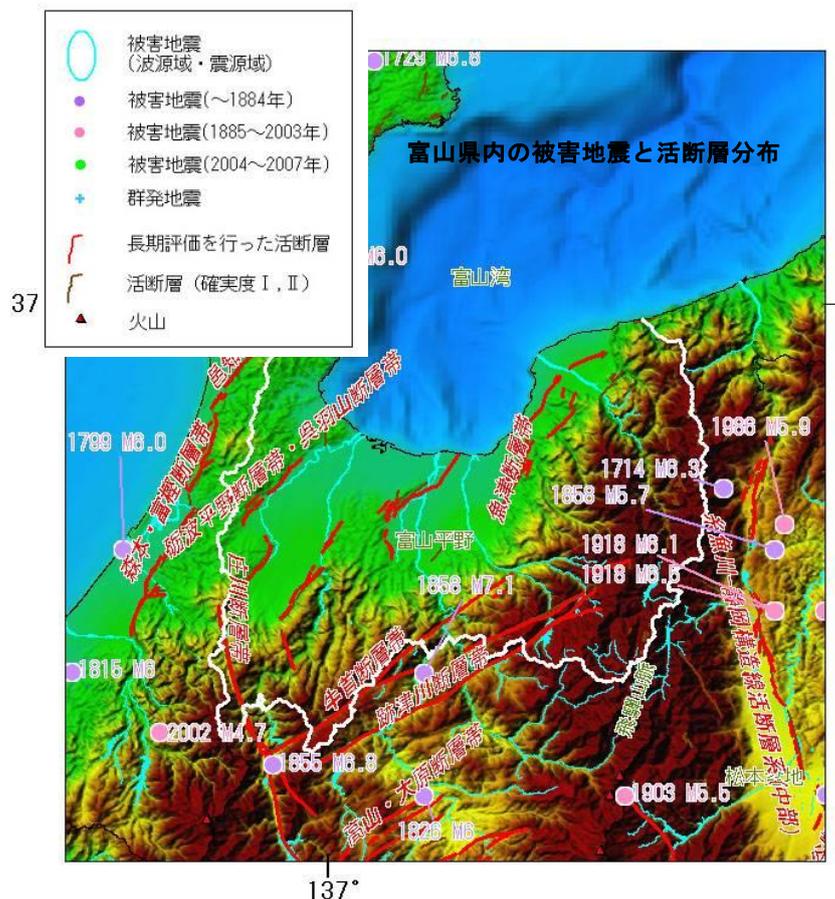
※文献 5)をもとに作成

飛越地震は1858年4月9日(安政5年2月26日)に、越中・飛騨国境(現在の富山・岐阜県境)の跡津川断層を震源に発生したM7.0-7.1と推定される地震で、安政飛越地震とも呼ばれています。本地震は北陸地方や飛騨国を中心に大きな被害をもたらしました。特に立山連峰では、跡津川断層の東端部にあたる鳶山が大崩壊しました(鳶山崩れ)。この崩壊により立山カルデラ内に大量の土砂が流れ込んで常願寺川上流が堰き止められ、堰き止め湖が形成されました。この堰き止め湖は、余震等により二度(4月23日、6月8日)にわたって決壊し、下流の平野部に大きな被害をもたらしました。

液状化については富山藩士の体験記があり、「水や砂が噴出した」という被害状況が描かれています。また液状化した地域は、研究報告から氷見市沿岸部、小矢部川・庄川下流域、神通川常願寺川下流域等の広範囲にわたり推定されています。

平成19年能登半島地震は、2007年3月25日に石川県輪島市西南西沖40kmの日本海で発生しました。富山県の氷見市、小矢部市、射水市、富山市、舟橋村及び滑川市で震度5弱を記録しており、富山県内で震度5以上を観測したのは、1930年の大聖寺地震以来77年ぶり、観測史上2回目の地震でした。

この地震により液状化現象が認められたのは、氷見市比見町氷見漁港付近の道路と伏木富山港で、いずれも噴砂現象が確認されました。



※文献 6)より転載